LIBRARY IICHIKO 164 [SBN 978-4-910131-44-3

は

文化科学高等研究院出版局

tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

円

(税込)

 \bigcirc

1010

教育の文化学(1)』

IBRARY IICHIKO 164 AUTUMN 2024 10月31日

成人が6週間で字の読み書きできる実際をなす。こうした、近代及び産業社会を根元から問い返成人が6週間で字の読み書きできる実際をなす。こうした、近代及び産業社会を根元から問い返成人が6週間で字の読み書きできる実際をなす。こうした、近代及び産業社会を根元から問い返成人が6週間で字の読み書きできる実際をなす。こうした、近代及び産業社会を根元から問い返成人が6週間で字の読み書きできる実際に多々出会う。 まさったく日本で通じない現実に直面。未だにそうだが、世界でなされている多様な考証は、日本ではほとんど消化されていない。海外移植がダメだという批判など超えて、何にも導入されていない。世界線にあまりに立ち遅れている。商業出版では「なんだそれは」と刊行されないし、大学い。世界線にあまりに立ち遅れている。商業出版では「なんだそれは」と刊行されないし、大学でカデミズムでは何も知られている。本誌は世界線で学術を開いてきた。知の遅れをとっていては、新たな日本の建設は立ち遅れるばかりだ。 ですべきは、イリイチが言っているように、天動説か地動説かではなく、天球を置くか外すかなすべきは、イリイチが言っているように、天動説か地動説かではなく、天球を置くか外すかなすべきは、イリイチが言っているように、天動説か地動説かではなく、天球を置くか外すから見ない。 は、新たな日本の建設は立ち遅れているように、天動説か地動説かではなく、天球を置くか外すかなすべきは、イリイチが言っているように、天動説か地動説かではなく、天球を置くか外すかなすべきは、イリイチが言っているように、大動説かではなく、天球を置くか外すかなすできる。 述が届くようになってきたことがあちこちで起きている。らの脱出が実際味を帯び始めている。メキシコで考えがう国際セミナーをなしたのは、2000年頃だ。以来2 う国系: 所」が見えない。つまり、 の問題だった。それが今や ヘ、環竟と生存の地盤が見えてハなハ。本誌が国際5や「社会」なる天球を外すことにかかっている。そが言っているように、天動説か地動説かではなく、 Rめている。メキシコで考えがひっくり返って50年、ようやく私の言いは、2000年頃だ。以来20数年、ようやく常識という思い込みか環境と生存の地盤が見えていない。本誌が国際版で社会の実定性を問「社会」 なる天球を外すことにかかっている。そうしないと実際の「場言っているように、天動説か地動説かではなく、天球を置くか外すか いくのか」 ▼サティシュ・クマ 本哲士インタビュシューマッハ哲学 をとって

▼兵藤裕己「『平家物語』と中世国家論」 から紐解く平和教育学」 [document]

CULTURAL STUDIES OF EDUCATION I

≡iichiko

A5 変形 128 頁 1650 円 (本体+税 10%)

【監修・アートディレクター】 河北秀也 (かわきた ひでや) 1947 年生まれ。日本ベリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。 本誌プロデューサー、アート・ディレクター

【編集・ディレクター】 山本哲士(やまもと てつじ) 1948年生まれ。 政治社会学、ホスピタリティ環境学。 主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』 『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、 の日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』『フーコー国家論』 ほか多数。

化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com

て大いずなでま間

ehescbook.com

す歴史研究を成していく。と出現していた。フィリップ・近代的に発明されたもので、となっている。学校教育は、

・アリエスはさらに、病気、性、近代以前に子どもは存在して、真に子どものためになってい

とき同じくして、

す。こうした、近代及び産業社会を根元から問ブラジルの教育学者パウロ・フレイレは、非識

家族など、

近代常識をひ

非識字の

メ返の返が

〈学校〉と〈教育〉と〈学ぶ〉は、られている。 さらに、 医者たち

医者たちは新たな病気=病名を次々に作り出していく

そこに

iatrogenesis

なのに、

になっているのか。それにやや先立ち、児尭子どもは学校で教育を受けないと何も学べ

な

していなかったという驚愕的な歴史研究がているのか。それにやや先立ち、児童期は

病人の数は増えるばか純である。医者・病院

・病院が病気を治

していたなら患者は減って、いずれ病気はなくなるはず研究者たちが訪れ、中には頭を抱えて黙り込む医者も

していた医療批判のセミナー

から